

私の童話づくり



渡辺桂子

童話について論ずるとき、よく問題になることは童話は芸術であるか教育であるかということであります。人によってその考え方はいろいろあるようですが、私自身は小説や戯曲と同様に童話文学、即ち芸術だと考えています。それでは童話は教育性を全く無視してよいかというとは決してそうではありません。

童話の場合は、その対象が子どもであるということから、おのずとその内容や表現方法に制限があります。解りやすく正しい文章表現をすること、これは小説の場合でもいえることだと思いますが、童話の場合にはいっそう守られなければなりません。また内容についても同様子どもの理解出来る範囲には非常な制限があります。殊にこれが幼児の場合であればなおさらです。小説などにはしばしば出てくる非常性や冷酷性、または悪の讚美や破壊的なものは子どもには理解の出来ないことであります。かりに出来たとしても、子どもの精神的刺戟ということを考えれば、当然そのような内容のものはさげなければなりません。そこで自然に童話における望ましい方

向というものは決まっています。童話は子どもの精神生活を豊かにし、子どもに納得のいく安定感と幸福感を与えるものでなければいけないと思うのです。そうしてテーマとしてはかなりはつきりとものごとの良し悪しをうたつてもかまわないと思っています。

そこで前の問題にかえりますが、結果的には童話芸術は童話教育と一致している、或いは混然一体となっていることはいえると思います。ただはじめに申しました通り、根本的な童話づくりの態度としては、私は童話はどこまでも芸術であるという考えで書いているわけです。そうでなければ、決していい童話は出来ないと考えます。

しかしそういう私自身、現場のものであるというにおいが強いため、ともすると作品が教育的でありすぎることが多いのです。大事な紙面を借りて自分自身の反省になつてしまうので申しわけないのですが、私の童話は、やはり悪い子がいい子になるのを急ぎすぎるようです。またいわんとする教訓を露骨にあらわしすぎるよう

す。解かしてもらいたいためにこれでもかこれでもかという押しつけも多いようです。

童話は決して説教ではありません。子どもは決して人生について知りたいとか、人間について考えたいなどと思って童話をきいたりするのでありません。いろいろの子どもの遊びと同様に童話をたのしむことが出来るようであればなりません。けれどもお説教的な童話、何かを教えてやろう式の童話ではたのしいはずがありません。子どもは実に敏感です。押しつけや、お説教の童話にはたまち不愉快のいろを示して退屈がります。そしておしまいには童話などには興味を示さなくなっていくます。しかしだからといって、ただゲラゲラと子どもを笑わせたりするような子どもに媚びる童話も困ります。

それではどういう童話がいい童話なのか——そこに童話づくりの難かしさがあるのだと思います。私のわずかな童話づくりの経験ではこれこそ幼児童話の傑作ですと紹介する作品もありません。けれども今回は「私の童話づくり」という課題でありますので、わずかな作品の中から、いくらかましなもの、といえます。自分の気に入っている童話をひとつ取りあげてみたいと思います。

題は「おまえも種をまくがいい」というのですが、これを創作した動機を簡単にお話いたします。

ある日、私のクラスの子どものおかあさんが、子どもがおじいさんの大切にしている花だんを荒らして仕方がないといってみえたのです。注意すれば注意するほどおもしろがって花だんに入って荒ら

すので、どうしたらいいだろうということでした。私はそのとき、注意することよりも実際に子ども自身にも、花を作らせたかどうかと申しあげました。あとになって、このことを実行して下さったおかあさんが大成功でしたと報告して下さったのですが、そのとき私はこれは童話になるなど考えたのです。

そこですぐに、花畠を荒らす子どもが自分もおじいさんと花をつくり、その世話をしているうちに花がかわいくなり自然にそういうことをしなくなつたという意味の童話を書いてみました。けれども実際出来あがつたものは、ずいぶん説教じみたものでした。自分でもおもしろくないのでその後何度も書きなおして教訓ではなく童話としてのおもしろさを表わすために努力いたしました。その結果、後に書きましたような童話が出来あがつたわけです。むろん傑作などというものではありませんが、童話づくりの苦勞のあとを少しでも理解していただけたら幸いだと思ふのです。

幼年童話「おまえもたねを

まくがいい」

おじいさんが、花ばたけに スミレの たねを まきました。

まもなく、 スミレは みどり色の 小さなめを だしました。

ところが ある日、その スミレの めが、だれかに すっかり
ふみつぶされて いました。

「タロウだな。」

と、おじいさんは 小さな タロウを よびました。

「だめじゃ ないか、花ばたけを あらしちゃ。かわいいそうに スミレの めが ふみつぶされた。」

すると、タロウは 口を とがらせて いいました。

「だって ぼく、しらなかつたんだもの。」

「それじゃ、こんどは きを おつけ。」

おじいさんは そう 言って、またスミレのたねを まきました。そうして、タロウに いいました。

「さあ タロウ、おまえも たねを まくがいい。かわいい 花が さくんだから……。」

タロウも、おじいさんの となりに スミレの たねをまきました。た。

まもなく、スミレは みどり色の 小さなめを だしました。

ところが ある日、その スミレの めが、だれかに すっかり ふみつぶされて いました。

「チローだな。」

と、タロウは 子犬のチローを よびました。

「だめじゃないか、花ばたけを あらしちゃ。かわいいそうに スミレの めが ふみつぶされた。」

すると、チローは、口を とがらせて いいました。

「だって ぼく、しらなかつたんだもの。」

「それじゃ、こんどは きを おつけ。」

タロウは そう 言って、また、スミレのたねを まきました。

そうして チローに いいました。

「さあ、チロー、おまえも たねを まくがいい。かわいい 花が さくんだから……。」

チローも タロウの となりに スミレのたねを まきました。

まもなく、スミレは みどり色の 小さなめを だしました。

ところが ある日、その スミレの めが、だれかに すっかり ふみつぶされて いました。

「ミーヤだな。」

と、チローは 子ねこの ミーヤを よびました。

「だめじゃないか、花ばたけを あらしちゃ。かわいいそうに スミレの めが ふみつぶされた。」

すると、ミーヤは 口を とがらせて いいました。

「だって わたし、しらなかつたんですもの。」

「それじゃ、こんどは きを おつけ。」

チローは そう 言って、また、スミレのたねを まきました。

「さあ、ミーヤ、おまえも たねを まくがいい。かわいい 花が さくんだから。」

ミーヤも チローの となりへ スミレのたねを まきました。

まもなく、スミレは みどり色の 小さなめを だしました。

ところが ある日、その スミレの めがだれかに すっかり
ふみつぶされて いました。

「ビビーだわ。」

と、ミーヤは ひよこの ビビーを よびました。

「だめじゃ ないの、花ばたけを あらしちゃ。かわいそうに ス
ミレの めが ふみつぶされた。」

すると ビビーは 口を とがらせて いいました。

「だって わたし、しらなかつたんですもの。」

「それじゃ こんどは きを おつけ。」

ミーヤは そう いうて、また スミレのたねを まきました。

そうして ビビーに いいました。

「さあ ビビー、おまえも たねを まくがいい、かわいい 花が
さくんだから——。」

ビビーは ミーヤの となりに スミレのたねを まきました。

まもなく、スミレは みどり色の 小さなめを だしました。

もう だれも 花ばたけを あらす ものが なくなったから
です。

スミレは どんどん 大きく なりました。

やがて つぼみを つけました。

ビビーは うれしく なって いいました。

「わたしの スミレに つぼみが ついた。」

子ねこの ミーヤが いいました。

「わたしの スミレも おんなじよ。」

子犬の チローが いいました。

「ぼくのは、もっと 大きいよ。」

小さな タロウが いいました。

「ぼくの つぼみは さきそうだ。」

さいごに おじいさんが いいました。

「わしの スミレは、もう さいた。」

タロウたちは、目を まるくして いいました。

「なんて かわいい 花だろう。はやく、ぼくらのも さけば
い。」

そのうちに、タロウの スミレが さきました。

チローの スミレも さきました。

ミーヤの スミレも さきました。

ビビーの スミレも さきました。

「きれいだなあ。」

と、おじいさんが いいました。

「きれいだねえ。」

と、みんなも いいました。

「すてきななあ。」

と、おじいさんが いいました。

「すてきだねえ。」

と、みんなも いいました。